

機関番号：22604
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20520712
 研究課題名（和文）南西日本の過疎高齢海村における地域おこしと観光資源の開発に関する社会人類学的研究
 研究課題名（英文）Anthropological Study on community-based revitalization and tourism resources development in depopulated and aging maritime areas in South-western Japan
 研究代表者
 高桑 史子 （TAKAKUWA FUMIKO）
 首都大学東京・人文科学研究科・教授
 研究者番号：90289984

研究成果の概要（和文）：過疎高齢社会とされる村落において、住民は、人口減少、少子化、高齢化という状況と共存しつつ、脆弱性を乗り越えるための様々な戦略をたて実行している。それは地域が潜在的に有する人的資源の活用であり、また村落内部と村落外からの様々な相互行為によって構築されてきた村落を存続させるための戦略である。南西日本の複数の海村調査から外部のまなごしを巧みに取り入れた自律性のある村落社会の有様が確認できた。

研究成果の概要（英文）：In depopulated and aging societies, people can be well adapted to the circumstances, that is to say, decreasing population, declining birth rate and rapid aging. Also people think up practical strategies in order to overcome their vulnerabilities that are characteristic of those societies and continue their natal traditional villages. Those strategies are constructed by practically using potential human resource and interactive actions between external and internal actors. Research in some small maritime villages located in southwestern Japan proved that these communities can find the way of overcoming the vulnerabilities and establishing community-based development.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：過疎高齢化、海村、地域おこし、観光開発、観光資源、村落の自律性、郷友会、

1. 研究開始当初の背景

現在の島嶼社会や海村社会では、過疎や高齢化を背景に、「地域おこし」や「地域の活性化」という課題の克服に直面している。この状況に対し、行政の側からの地域開発とい

う名目で実施される様々な産業振興策や開発行為と、住民や「外部者」の側からの自発的な「地域おこし」「伝統のみなおし」との相互作用が村落社会を舞台に展開している。ここでいう「外部者」とは現在は他所で暮

らす当該地域出身者も含まれ、加えて地域の自然や文化を保存したり、観光資源としての価値を見出そうとする人々（自然保護にかかわる人々、観光関係者、観光客等）のことである。住民や行政と「外部者」との相互作用から新たな地域社会が形成され、それが持続的発展や持続的開発へと進展する可能性がみられることを前提に、西日本から南日本において当該社会の今後の方向性について提言を行うことを目指すものである。

2. 研究の目的

活性化や地域おこしという言説を考える際に、それぞれの社会の立地・歴史、さらに村落構造や外世界との関係性がどのようにして構築されているかを分析の視角に盛り込む必要がある。また、そもそも「過疎・高齢化」とひとくくりにされ、行政や医療福祉の面においてマイナス面が強調されがちな現象をミクロな個々の家族の視点で捉え直す必要がある。本研究では、その社会的・文化的背景の異なる5地域を対象に以下の7項目を中心に実態調査を行う。(1) 漁業など産業構造の変化の把握に加えて、高齢化の現状、(2) 開発や地域おこしに向けた取り組みや企画、住民の意識、(3) NPO 法人や老人会・漁協・地域内諸組織と行政諸機関との連携、(4) 教育現場における郷土教育、伝統芸能などの教育現場への取り組み、(5) U ターン者の実体、郷友会との関係、(6) 観光客の様態、移住者の実体、(7) ジェンダーによる相違。以上の調査データから社会の動態的把握を行うとともに、住民相互のネットワーク、住民と遠隔地（移住者の出身地、U ターン者がかつて居住していた場所や子世代が居住している場所など）とのネットワークの分析を行い、それぞれの社会の比較を行いながら、「過疎・高齢」という社会が今後どのような方向性に位置づけられるかを考察する。本研究の目的は、過疎・高齢社会が一定の脆弱性を有しているものの、実際の居住者、出身者、訪問者、そして行政関係者による相互行為の結果、地域のあり方が創生されていく過程を抽出し、続いて提言を行おうとするものである。従来、過疎高齢社会は脆弱性が内在する社会とされ、それを克服するための政策が模索されてきたが、本研究では、地域の知的財産あるいは人的資源というのが内部・外部のまなざしによって新たに解釈され、それが実際に地域おこしのための戦略として有効利用されていく過程を考察しようとするものである。

3. 研究の方法

本研究に着手するにあたって代表者は対象地域に関して研究蓄積があり、すでに収集した資料に加えて、詳細なデータ収集を行った。対象地域とそれらの特徴と地域が直面する課題は以下ようになる。

(1) 鹿児島県薩摩川内市甑島：阪神間からの定年後 U ターン者が多く居住し、帰郷後も阪神間に住む子世代と緊密な関係を保持している。市町村合併により薩摩郡から（旧）川内市を核とする広域行政単位となったことと、3島（上甑、中甑、下甑）架橋の計画が具体化している。市町村合併と架橋という外的要因による社会の動態的把握を目的とする。

(2) 山口県周防大島町の旧東和町と沖家室島：町村合併により周防大島の4町が1町になったが(1)のように本土と島という広域合併ではなく、集落内の諸機関には大きな変動はない。日本国内はもとより、ハワイなど海外にも多くの移民を輩出したことと、民俗学者宮本常一の出身地、「長寿の島」という3点を観光と地域おこしの資本として活用させている当該地域において行政と住民との連携による地域おこしの様態を把握する。

(3) 鹿児島県大島郡瀬戸内町：奄美大島の最南西に位置する当地区は、カツオ漁、農業、大島紬の衰退に加えて、奄美空港から最遠地であるが、近年の瀬戸内町の田舎暮らし支援センター、空き家バンクなど定住化政策とエコツアーによる観光など外部者を積極的に受け入れる政策を実行している。本研究では定住化政策の動向と移住者に関する実態調査を実施する。

(4) 沖縄県石垣市北部地区 (5) 竹富町鳩間：両地区は近年の沖縄移住ブームによって新住民の増加がみられ、また(4)の石垣島北部地区では移住者をターゲットにしたマンション建設計画があり、西表島に建設された大型リゾートホテルなどとともに、地域内に新たなコンフリクトが生じている。(5)の鳩間島は、高速船の増便により観光客数が急増し、民宿が増え、また外部の業者が島の従来の民宿を圧倒しはじめている。移住、観光開発、自然保護という課題に対する地域社会の動向を北部地区の数カ所の集落と竹富町鳩間島で比較研究を実施する。

以上の5地区の特徴と直面する課題を前提に、文献研究に加えて、現地滞在による聞き取りや対話によって詳細なデータを得ること、公的機関や種々の外郭団体、観光関係者に加えて、郷友会などを中心とする出身者との面接によってもデータを収集する。

4. 研究成果

3年間にわたる継続調査のなかで1年目は上記5地域の概略を把握することにつとめ、続いて2年目からはより詳細にかつ地区を限定して調査を実施した。ここでは、まず、論点を明らかにするために、各地域の調査で得た知見の概略を整理し、続いて詳細な調査を行った鹿児島県薩摩川内市と沖縄県石垣市・同県竹富町鳩間の詳細な報告を行い、最後に結論と今後の展望について述べることにする。

(1) 山口県周防大島町の一部となった旧東和町と鹿児島県瀬戸内町の特徴は、ともに周防大島と奄美大島という南北に長くかつ広大な島の先端域をしめており、中心部と隔絶性の克服が課題である。周防大島はたとえば佐野真一が『大往生の島』(2006年文春文庫)で描いたように「高齢者が自立する島」のイメージを前面に出すことが地域の特質を際立たせているともいえよう。さらに周防大島が知的資源として重視するのが宮本常一である。とりわけ旧東和町は周防大島文化交流センターにて宮本常一に関する資料収集と企画展や文化の発信を続けている。また特筆すべきは、周防大島の「離島」ともいえる沖家室島における地域リーダーの存在である。宮本常一が築いた知的財産の活用と、地域を牽引する文化運動のリーダーなどの存在から、周防大島のある種の特異な立場がみてとれる。本土に近い北岸域は、対岸の柳井市などに通勤するサラリーマン家庭の住宅地として開発が進み、周南地域の周縁部としての役割をもつに止まっているが、むしろ遠隔地の旧東和町が大島文化を特徴づけているともいえよう。このような状況にある大島を訪問する観光客は、宮本常一の足跡を訪ね歩いたり、民俗学における「ブランド地」である沖家室島訪問を目指すなど、特殊な観光地を訪ねる目的意識の明確な外部者のまなざしに適合しているといえる。周防大島は近年の瀬戸内海全域を視野においた観光地という点でいえば、西端に位置することで、観光「避地」のイメージがあるものの、むしろ(誤解を恐れずに断言すれば)旅行のエリートを意識した開発が可能な地域である。さらに最近では、祝島における中国電力の原発の候補地としての現実に直面するなかで地域おこしが議論されている。

奄美大島の瀬戸内町は大島の南端という立地とさらに南方にある加計呂麻島が脚光をあびるようになって以来、北部の中心都市名瀬市と加計呂麻島との中継点としての役割が大きい。奄美群島は本土と沖縄県との間で、奄美文化の独自性と同時に琉球文化圏であるという二重帰属性のなかで奄美文化の独自性を発信し、さらにそれを観光へと成熟させようとしてきた。しかし、島の北端の空

港から南端までの道路整備と古仁屋港の整備は、古仁屋を観光客の通過点として印象づけることになり、地域活性化や地域おこしへと連動させるのは困難である。古仁屋から西へと向かう集落は人口減少と学校廃校が目立ち、町が打ち出しているUターン者やIターン者の多くは古仁屋市街地に集中してはいるものの、地域おこしへと展開させるには課題がある。

「離島ブーム」による加計呂麻島観光が盛況を迎えているが、瀬戸内町は地場産業の発展による活性化の模索が続く。

(2) 鹿児島県薩摩川内市甑島列島には上甑島、中甑島、下甑島の3島の有人島があり、本土側との大規模合併以前は里村、上甑村(以上上甑島と中甑島)、鹿島村と下甑村(以上下甑島)の4村から形成されていた。本研究では、3島の中でも本土から最も遠方に位置する下甑島を主たる調査地と選定した。上甑島と中甑島に比べると下甑島は島の中央を峻険な山脈が連なり、東海岸と西海岸とは海岸線の違いだけでなく、冬期の季節風と波浪の状態が大きく異なる。代表者は過去に甑島を中心に漁民の移動に関する研究を実施し、甑島が近代以降多くの漁業出稼ぎ者を輩出したこと、甑島近海が上方や五島・天草近海の漁民の出漁海域であることから、これらの地域から甑島へ移住する人がいたと同時に、甑島からも漁民が本土各地に移住したことを指摘した。また甑島は近代以降阪神間への出稼ぎ者の送り出し地となり、阪神工業地帯の拡充にともない移住者が増加した。阪神間への出稼ぎ者・移住者は尼崎市において出身集落ごとに同郷者集団(郷友会)を組織した。この同居者集団は大正末期から昭和初期にかけて続々と組織され、互助的なグループとして成長したが、やがて阪神間への移住者の子や孫世代になると、故郷への想いは希薄化していった。

甑島における地域振興や地域おこしの担い手の中心的役割を担ったのが定年後Uターン者である。日本の高度成長期に島をでた人々が定年をむかえる1980年代末から2000年代初頭にかけて甑島への帰還者が増加した。帰還者の多くは阪神間では積極的に郷友会で活動した、そのため故郷との関係も強く、またそのことにより彼/彼女たちは故郷への心のつながりを強く持ち続けていた。阪神間での生活が軌道にのり、また甑島出身者同士で世帯をもつが、阪神間で生まれた子世代は親の出身地にはあまり関心を示さず、そのことが阪神間での疎外感をもつに至り、定年後の帰還を決意させたのである。久しぶりに帰郷した故郷で、彼/彼女は変貌する故郷に驚愕するとともに、自文化の発掘と発見に取り組み始める。つまり異文化経験が自文化を相対化して見ることを可能にするとともに、

自文化への愛着が自文化の把握・理解・そして保存へという過程を辿るのである。定年後Uターン者は村落の外部と内部双方のまなざしを有する存在であり、彼／彼女の行為を通して村落社会の地域文化の見直しが行われているといえよう。また帰還者の多くがその後の村落内組織（区長や公民館長など）に就任し、役場とのパイプ役になっている。

甌島のどの集落も高齢化率は非常に高い。全国平均を大きく上回っている。また高齢夫婦のみの世帯や高齢者単独世帯も多い。しかし、このような高齢者や高齢世帯の多くは、一般に考えられているような「個」や「孤」の生活を送っているのではない。それは、集落住人の大半が幼少期からともに過ごした同世代の人たちであり、また集落のほぼ中心にある寺がコミュニティセンターの役割を果たしているからでもある。熱心な浄土真宗の信者が住人である甌島では、朝のおつとめに集落の多くの人々が寺に集まる。またオバンヤクという寺の掃除と毎月1日と15日に行われる行事の責任役が輪番でまわってくることで、空き地での農作業等、空いた時間での同世代間の雑談などきわめて緊密な人々のネットワークが存在する。このように高齢者しかいない集落では自然に高齢者が地域の行政を担うことになり、結果的に絶えず高齢者間の相互行為が行われることになる。

甌島へのUターン者数はその後停滞ないしは微減となる。2000年代初頭を最後に帰還者のいない集落もある。また帰還者のなかには帰郷後10数年間は集落に居住するものの、最終的には子どもたちのいる阪神間に再帰還する者も増えている。

高齢者の村落においてさらなる高齢化が進むことが想定され、新たな地域のみなおしと今後の活性化が高齢者によって再考されている。

(3) 沖縄県石垣市と竹富町はともに全体的な傾向としては1980年代頃に人口減少傾向が止まり、その後はほとんど変わらないか、あるいは集落や島によっては微増の状態が続いている。この傾向をささえる最大要因が近年の「沖縄ブーム」である。ブームは暖かく美しい海をもつ石垣島への移住ブームを呼び、幅広い年齢層が石垣島へ移住している。移住者といっても、正式に住民票の移動をする世帯は決して多くはなく、まずは短期間の居住を開始、その後に適当な土地を購入して家を建てたり、空き家を購入して移住するという過程を経る場合が多い。とりわけ石垣島は四箇（登野城、大川、石垣、新川）と空港近辺の平得や大浜あたりまで、移住者用にマンションが乱立している。このマンション居住者は実際の住民というよりも、仮住まい、つまり本格的に島内に移住する前段階として住んでいる人が多く、実際に役場でもその

実体は把握出来ていないのが実情である。

移住者の多くは、集落内に居住するよりも、集落からやや離れた土地に家を建てることが多い。これら集落から離れた海沿いの土地は台風の時のみならず普段でも海風が吹き付け潮害の心配もあるので集落は概して海岸よりやや内陸に入ったところにある。このような伝統的な八重山の住宅地の周縁部とりわけ海沿いに家を建てる移住者の目的はオーシャンビューを意識したものであり、集落の住民とはあまり日常的な接触をもたないか、あるいは別荘感覚で使用している。

また、西部の一部では、地元や内地のデベロッパーが別荘地としての新たな住宅団地を開発し、そのような地区にはこれまでの八重山の伝統的なたたずまいとは異質の住宅空間が出現している。しかしながら、北部域の移住者はこのような状況と若干異なり、集落内に住まいを得て、集落の人々とも日常的な関係をつくりあげていることが多い。これは北部地域の集落の大半が戦後の開拓集落（宮古や本島からの開拓移民によって成立した集落）であることと、一時は集落そのものが消滅しかねないほどの人口減少を経験し、その後新たな本土からの移住者によって集落が維持されているからである。

このような石垣島北部と同様の状態が竹富町の鳩間島である。鳩間島も1960年代から毎年人口減少が続き、70年代以降は水や電気の問題以上に深刻になったのが廃校問題である。廃校阻止に関しては森口豁著『子乞い 八重山・鳩間島生活誌』（マルジュ社1985）でとりあげられているが、廃校問題と島をあげて戦っていた時期は、また本土から若者が単独あるいは夫婦で一時滞在をする時期とも重なる。若い夫婦が滞在し、子どもが鳩間小学校に就学し、その家族がやがて島を出ると、また別の夫婦が移住し、子どもが就学する、というように、絶えず廃校と向き合いながらかろうじて廃校から逃れていたのである。やがて鳩間は郷友会から鳩間関係者の子ども、あるいは民間施設（孤児院など）によびかけて海村留学や里子として子どもを島の学校に通わせる事業を開始し、これが軌道にのり廃校を乗り越えた。さらに石垣島と同様に沖縄ブーム、離島ブームにより、鳩間への移住者が増加し、小学校をはじめ長期間休校状態であった鳩間中学も再開した。

また2000年代に入ると、かつて島を出て、石垣島で就業していた世代が定年を迎えるようになると、鳩間に残っていた土地に新たに家を建て、石垣島から週末に鳩間に戻るようになっていった。この背景には高速船の就航があり、金曜の夕方から月曜の朝まで鳩間滞在が可能になったということがあげられる。2000年代になると、テレビで鳩間島を舞台にしたドラマが放映されこともあり、観光客

が増大し、それに伴い民宿の数も増加した。石垣島に居住していた鳩間出身者は、日常的にもインフォーマルなネットワークを形成し、さらに豊年祭などの重要な祭祀は郷友会の協力なしでは成立しえない状況であった。しかし、在石垣の鳩間出身者の生活の本拠地は依然として石垣島であり、鳩間島は週末に滞在する場であり、祭祀の際に係わる場である。実際に鳩間島で生活しているのは、学校関係者と鳩間で民宿経営や観光関係の仕事に就いている人たちである。学校関係者を除くと、鳩間住民の多くは若干のUターン者と本土出身者でしめられるようになり、高齢人口よりも若年～中年人口が増加するようになった。

鳩間島で人口が激変していた頃、村落祭祀を担っていた神役(祠祭者)は後継者もなく、また後継予定者も転出してしまった。島の中心的御嶽の祠祭者も石垣島に住み、定期的に島に通い、また行事があるたびに祭祀を実施していた。農業や漁業、さらに人々の生活と係わっていた御嶽祭祀が希薄になり、神役の不在により、月ごとの行事も省略されることが多くなっていった。しかし、近年になって帰島し、島の中心的役割を担う家族は衰退していく村落の活性化という課題に直面せざるをえない。そのために伝統行事を豊年祭や結願祭に凝縮させると同時に地域おこしのための戦略をねるなかで、新たな観光資源の発掘に目を向け始めた。こうして考案されたのが鳩間島音楽祭で、5月の連休の1日を使って、盛大な音楽祭を実行するようになった。もともと多くの歌手を輩出し、出身者や居住者が本土での演奏会を開くなど、音楽活動の盛んであった鳩間島ではリピーターとその口コミで、音楽祭の様子は全国に伝わり、やがて鳩間島を代表するイベントへととなった。

在石垣の鳩間出身者と在沖縄の鳩間出身者の間には、このように変貌した鳩間に対して意識の乖離がみられる。それは、絶えず故郷鳩間と現住地石垣を往復し、鳩間の実情を把握し、より現実的な対応が可能な前者と、頻繁に帰郷することができず、そのためにかえって故郷への心的想いを強化する後者との相異である。

(4) 従来のような村で生まれ村で一生を終えるようなライフスタイルは希薄化しており、そのような状況で伝統的な村落も形態を変貌させながら存続している。新住民が絶えず入れ替わりながら、共同体は存続し、そのような新たな形の共同体が生成しつつあるといえよう。地理的装置としての村(ムラ、共同体)は地域の自律性や凝集性を導く伝統的なもの(寺や神社、祭祀、年中行事など)は希薄化しているという点では、離村を妨げる要因は無くなってしまった。しかし、村は

彼/彼女あるいは家族の転出先でも行き続けている。村は転出後も継続して存続し、人々は実際に生まれ育った地理的空間である故地と実際の住地とを往復しながら2つの村を生き、その村は連続体として個々人の意識の中に存在している。当該村とは縁のない者や家族にも村は開放され、その家族の存在が転出者にとっての村を存続させるために重要な役割をはたしている。またこのような転入者が地域文化を「発見」し、また新たな文化の担い手として、転出者の帰還を可能にする環境整備をしているともいえよう。

村出身者と新住民、さらに行政や地域振興に従事する者との様々な相互行為により、新たな村が創生され、それが今後も村を新しい形の共同体へと展開させる原動力となる。

本研究は、今後、帰郷者と村を訪問する者、村を出た者とのまなざしの交叉により、村がどのようにとらえなおされるかを検討し、さらにそのようなとらえなおしが新たな村の自律性構築へと向かう動態的研究へと展開する。つまり既成の村から新たな村が再生する過程を考察する動態的研究として位置づけられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ①高桑史子 「スリランカ、海村の人びと」『季刊民族学』133・2010 夏(査読無): 56-60 2010
- ②高桑史子2008「津波被災住民と仏教寺院—スリランカ南部海村の事例から—」『パースリ学仏教文化学』第22号 117-122(査読無)

[学会発表] (計3件)

- ①高桑史子 「スリランカ漁民の生活空間としての海浜—漁業と観光—」日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業「アジア大都市周辺環境・防災問題解決に寄与する湿地・植生バイオシールド工学の展開」2010年9月7日 埼玉大学環境科学研究センター
- ②高桑史子 「波浮と泉津での社会人類学調査研究の意義と成果」首都大学東京と島嶼の連携活動フォーラム(特徴ある教育開発プロジェクト・島嶼共生研究環成果報告会) 2009年10月11日伊豆大島(パネル展示)
- ③高桑史子 「内戦復興と津波災害復興のスリランカから—新たな社会組織。社会関係構築の可能性と人類学者の役割—」南山大

学人類学研究所 60 周年記念シンポジウム
「21 世紀アジア社会の人類学：回顧と展望」2009 年 12 月 19 日南山大学

〔図書〕（計 4 件）

- ①高桑史子2010 首都大学東京社会人類学研究室「石垣島の多様な高齢者たち－シマンチュとナイチャーがつくる八重山世－」伊藤眞編『東アジアにおける高齢者のセイフティ・ネットワーク構築に向けての社会人類学的研究』（平成 19-21 年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究成果報告書）28－38（総頁数 233 頁）（査読無し）
- ②高桑史子編著 首都大学東京社会人類学研究室 『伊原間にて－石垣島北部地区の現在－』2010 年 41 頁
- ③高桑史子編 首都大学東京社会人類学研究室 『瀬々野浦・内川内の民俗－薩摩川内市下甗町瀬々野浦地区・内川内地区』2010 年 61 頁
- ④高桑史子編 首都大学東京社会人類学研究室『伊豆利島調査報告－過疎・高齢化する東京における文化資源開発の可能性に関する基礎的研究－』（平成 20 年度首都大学東京傾斜研究実績報告書）2009 年 63 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高桑 史子 (TAKAKUWA FUMIKO)
首都大学東京人文科学研究科・
教授
研究者番号：90289984